

---

# 東方 掃魔の剣

辛味ホルモン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方 掃魔の剣

### 【Nコード】

N6998S

### 【作者名】

辛味ホルモン

### 【あらすじ】

ある日突然、  
『幻想郷』という忘れ去られた者が来る場所に連れて来られた、いたって普通の高校生。

”蒼真 健”。

彼はいつもと同じ日常で”十六夜 咲夜”と名乗る一人のメイドに『超一級犯罪者』として命を狙われる。

そこから狂いはじめた健の日常。  
戦いの日々。

そして咲夜との恋愛。

ハーマンの友人が送るハードコアでスペクタクルアクションコメディ  
イー。

東方掃魔の剣。

## 第一話 右手に何かが宿ってる主人公のヤツって基本チートモノ（前書き）

はいこの度

東方掃魔の剣を書かせてもらいます。

作者の辛味ホルモンです。

この作品は以前、

友人のハーマン氏に投稿してもらいましたが、

現に自分自身の携帯（PC）での投稿が決まったため、

アチラの方は不定期更新になると思います。

前作を見て

『続きが気になる』

そして前作を知らなくても『見たい』

という方はどうぞコチラから拝見願います。

いまだ文章力が劣り、読み辛い点など多々あると思いますが、どう

ぞ長く愛読をお願いします。

長くなりました。

以下より本編となります。

でわどーぞ！！

## 第一話 右手に何かが宿ってる主人公のヤツって基本チートモノ

まだ世界は暗闇に包まれ、日本人ならだれでもベッドに入り眠っている時間。

俺こと”蒼真<sup>ソウマ</sup> 健<sup>ケン</sup>”も一人部屋の一角に置いたシングルベッドにて深い眠りに就いていた。

そして何時間経ったか、

密集したビルの隙間からお日さまが顔を見せ、小鳥達も朝を伝えるようにさえずりだす。

イヤになるくらい眩しい日光が窓を突き抜け俺の顔にかかる。

眩しいなチクショウ。

カーテンは仕事をしているのか？

目を半開き、開きっぱなしのカーテンに目をやると

昨日の夜にカーテンを閉め忘れて寝たことを思い出す。

……俺の過失か？

「ん……」

俺は少し唸りをあげてからグチャグチャになった毛布を自分の身体まで引き上げ、毛布に包まった。

朝……か……。

俺は静かに納得する。

枕元の時計を見ると、まだ6時をまわっていないことを知らされ、二度寝という誰が生み出したか、素敵な文化にたどり着く事が出来た。

今から俺が二度寝をするのはしごくとうぜんの事。  
言うまでもないだろ？

ああ今でも後悔しているさ。

何故あの時に俺は目を閉じてしまったんだ？

あそこでベッドからおりて、台所まで行き

「母さんおはよう」

なんて爽やかにキメればこんな事にならなかっただろう。

日常や普通、そんなありきたりで日常的な普通の生活。

……なんてこれから起こる日常的な普通に比べたらとても普通で日常的な世界。

なに言ってるだかわけワカらないだろ？

俺もいまだにわかっていない。

……

目をつぶって数分ほど経ってから妙な違和感を持ち出した。

先程まで布団とシーツのフワフワ感を身体全体で感じていたはずだ

……。

なのになんで首や頭皮、パジャマから露出した皮膚全体に痒みが現れるんだ？

シャツの背中上部に付いてるアレか？

いや、それとも違って背中全面痒い。

なんで痒い？

理解不能。ホワイ？

……

背中に感じる触感だけで推測出来るほど簡単な問題ではなかった。

俺は心底「やれやれまいったな」と小ばかにしか感じて目を開くことにした。もしかしたらいま寝ている場所は全面緑色の広く綺麗な草原かもしれない。……という夢なら最高。

さア目を開くぞ。

えいつ！！

……

おもわず…唸りをあげたね……

仰向けの状態から身体を持ち上げ、膝を付いて立ち上がる。

これもおもわず。

俺のいる場所は雲一つなく、まるで大海を思わせる大きな青空。そして足元どころか地平線まで広がる緑色の草原。

あゝ……

ありえない。よな？

ありえたとして、当てるか？普通？

俺は中腰になって風にゆらぐ草っぱを掴みとった。

……………。

確実といえよう悲しき現実には捕われた俺はなんともいえない顔をしていたんだろう。なんとリア充。

この綺麗な景色が地獄に見えてくる。

…えっ？

これマジ？

ドッキリだよね？

どっかのテレビ局が悪ふざけで一般人にドッキリを仕掛けるっつーヒドイ番組の撮影だよな？

あっ！！あれマジックミラーじゃね？

早くドッキリプレートを持って俺に顔を見せてくれよ母さん。

これからは勉強もちゃんとやりますから。マジで。

……………

あの……

ドッキリじゃないんすか？

……………俺は頭の中が真っ白になり、その場で立ち尽くしてしまった。  
いや膝について前のめりに倒れたかもしれない。

いや、考えてみるよ。

二度寝したらまったく知らない場所に来て、  
携帯だつてつうじないし……



アレ！？なんか気付いた。

「携帯だ！！」

俺しかいない草原に喜びの声が高鳴った。

そう考えたらパジャマのポケットになにかがあるような感じがしたんだ！！

ああんもう俺のバカ野郎<sup>ハート</sup>でも許すぞ。

これで助かるんだからっ……

俺はポケットから携帯を取り出し、画面を開く。

『圏外。』

俺が1番初めにみたのがこの二文字と、画面上で楽しそうに踊る羊の姿だ。無性に腹立つな。  
この羊。

だが時間帯を知ることが出来るんだからよしとしよう。

俺は時計替わりにしか使えないこの役立たずをポケットにつっこみ、身体を伸ばして声を上げる。

「ん〜」

あくびだ。

よくよく考えてみたら俺が「二度寝しよう」と思って直ぐに来た訳だから、

結果二度寝が出来なくて睡眠不足なんだよなア。

まさか夢の世界で眠ったら現実の世界で起きるなんてありきたりな  
オチだったりして……？

保証なんて存在しないが、やる価値はあろう。

俺は広い草原に手足を伸ばしながら寝転がった。

スツゲ、

空をこんなに見渡せるなんて……

あつちの世界じゃ絶対に無理だ。写メでも撮るか。

あ……

なんか……眠く……

………

………

「けーん

さつさと起きなさい

けーん学校の時間よー」

っせえ……なあ……

まだ6時ちょいじゃねーか、クソババア。

ぼんやりと目に映る目覚まし時計の針は6時を指している。

んっ！？6時か、これ？

あれ8時じゃね？これ？

ぼやけてね？

「早く起こせよ！！」

クソババアアア！！」

正気に戻った俺はベッドから飛び降り、  
パジャマを脱ぎ捨て学ランを羽織った。

学ランのボタンをしめながら階段を降りて行き、  
テーブルの上にあったトーストを口にほおり込む。

テーブルの上には目玉焼きと味噌汁、ごはんですよが置いてあった  
が俺は食っている暇もなく直ぐに家から飛び出した。

てか、どんなメニューだ？

悪いな母さん。

飯は後で食うよ。

「っべえ…」

こりやマジで遅刻する」

俺の学校まではバス移動含めて40分はかかる。

近道という術もなく、

諦めた俺は急ぎ足を緩めてゆっくり歩きだした。

はい諦めました。いさぎよく生徒会連中に怒鳴られてくるよ。

っん！？

なんだアレは！？

人気のない路地を歩いていたら道の真ん中に立つ謎の女性を発見。  
女性は銀髪の頭に白いヒラヒラ付きのカチューシャを装着し、更に  
どこぞのオタクが喜びそうなメイド服を着用している。

その女性の顔が見たいがため俺の足取りは軽くなり、だんだん距離  
は近付いていった。

おっ！！見えるあと少し！！

（パンツとかを覗いてる訳じゃありません。  
あくまで覗いているのは顔です。）

ピンと立ち、下を向くメイドさん。

やがて顔が見える位置まで近付い……

「蒼真健さんですね？」

ッ！？

俺の名前を…呼んだ？

期せずして起こった事態に俺は足を止めてしまつ。

「そ、そうっすけど…」

お宅…どこかで会いましたっけ…！？

なんで俺の名前を！？」

なんだこの女！？

さっきまでは初見メイドだったから期待してたけど、今となってはビビるくらい怪しいぞ…。

てゆうかなんでこんな所にメイドが？

よくよく考えてみたら全部怪しくねーか？この女？

「いえ、私達は今ここで初めて顔を見合いました」

言うが、実際メイドさんは顔を上げてくれず、俺は顔を見ていない。

「ハア…初めまして」

とりあえず挨拶は必要だろ？

「で、あなたのお名前は…  
やっぱり俺を呼んだっつー事はなんか用があるんスよね？」

「私は”<sup>イザヨイ</sup>十六夜<sup>サクヤ</sup> 咲夜”<sup>イザヨイ</sup> 初めまして。  
それで用事というのは…」

「用事というのは…？」

十六夜さんは顔を上げ、俺と初めて目があつた。  
白く綺麗な顔立ちに、  
外国人なのか青い瞳をしている。  
これで”不細工”などと表現してみる。  
とんでもない大嘘だ。

十六夜さんはニコツと首を傾げ微笑むと、  
白く細い腕をスウツと上げる。

「蒼真健さん…」

「はい…？」

条件反射的に返事をしてしまう。

すると突然！！

十六夜さんの右手が大きく振り下ろされる。  
そして一線！！

俺の頬が切れ、血が垂れた。

「えっ…？」

あの…十六夜…さん？」

「蒼真健！！」

あなたを超一級犯罪者としてこの場で処刑しますッ！！」

十六夜さんは両手に束ねたナイフをだし、

これほどにない一般ピープルな俺にその全てを向ける。  
ちよっ？

あんた顔付きからして18歳くらいでしょ？

その歳で殺しなんかしちゃ……（焦り）

えっ？俺が犯罪者？

「って…どわっ！！？」

「死になさいッ

蒼真…健ッ！！！！」

十六夜さんの投げるナイフが俺の髪の毛を切り裂き、壁に突き刺さる。

コンクリートの壁がまるでバターの様にザックリと…

女性の腕力と普通のナイフがあんなに威力を持つものか！！

さして十六夜さんの腕が人一倍太い訳でもあるまいし、なんだよこの力！？

それより……

この展開ッ！！！！？？

**第一話 右手に何かが宿ってる主人公のヤツって基本チートモノ（後書き）**

フフフ…

この空間にたどり着いたということは、  
本編の方を全部読んでくれたのですね？  
誠に有難うございます。

でわ次回掃魔の剣第二話  
お楽しみに



**第二話 犯罪者に悪者のイメージが無いのは俺だけか？ トンガリとか、いいー**

始めに謝つときます。

すいません。

自分機械オンチなものでタイトルとかいろいろ間違っていると思います。

マジですいません。

100%私の過失です。

(そりゃそうだ)

でわどーぞ

第二話 犯罪者に悪者のイメージが無いのは俺だけか？ トンガリとか、いい！

コイツ…

マジでやる気だ…

「観念しなさいっ！！

蒼真健！！」

なんてバトルパートに入ると思ったか？

冗談じゃない。

俺は一般人なんだぞ？

そしてココは法治国家の日本なんだ一旦落ち着けよ俺。

朝っぱらからメイドさんが俺を冥途へ送ろうなんて、ありえるか？

普通？

相手も人間、話せばわかるって。

「なア十六夜さん…

なんで俺を殺そうとするんだ？

そんなことしてもアンタが悪い思いするだけで…」

「黙りなさい！

アンタは犯罪者。

そして私はアンタを殺すように命令が下っているわ。

戦う理由なんてそれ以外に…

あるのかしらッ！！！！」

十六夜さんはバク宙をしながら大量のナイフを投げ飛ばす。  
もちろん標的は俺の訳で クソツタレ、悠長に説明をする暇がない。  
焦った俺の行動は単純にもヘッドスライディング!!  
ナイフをなんとか避けた!!

「っそつたれ…

俺が犯罪者だと……!?!」

ヘッドスライディングの余韻で少し転がりながら言う。  
そして落ちていた小石を拾い上げた。

「そういったつまんねー冗談が…

俺ア…一番でエい嫌いなんだよオウウツ!!!!」

小石を十六夜さんの顔へ向かい投げつけた。が!!

小石は見えない壁にぶつかった様に碎け、

同時にナイフが一本、俺の顔を目掛けて一直線に飛んできた。

しかし俺は猛スピードで突っ込んで来る猪ナイフをギリギリの所で  
身体を反らして避ける事が出来た。

てゅーかアイツ今、ノーモーションで投げたぞ?

どうなっていやる?

「チッ……

女だからって調子コキやがって…

この距離なら…飛び道具も使えねエエだろオオ!!」

俺は立ち上がって直ぐ  
メイドにボディプレスを仕掛ける。  
両手を広げる俺の間合いに見事、入りやがった。  
これなら捕まえられっ

「ア…レ…？」  
えっ…消え…た…？」

消えた…！？  
俺が手を閉じるほんの数コンマ秒で一体どこへ！？  
瞬間…！

後ろに強い殺気を感じ、咄嗟にしゃがむ。  
案の定、俺の頭を目掛けたナイフが電柱へ突き刺さった。

「てめえ…  
マジでやる気かよ…？」

「大マジッ…！」

っの…！クソメイド…！  
朝っぱらから瞬間移動とかすんなや…！  
6時頃にテレビ内でやれ。

またもナイフを投げ飛ばす。  
そしてナイフと共に十六夜さんは俺に向かってダッシュした。

一般人に二連攻撃とかすんじゃないエ！！

ナイフはやはり俺の顔面を狙い飛んできたが、  
ナイフが死角になって十六夜さんの姿が見えない！  
絶体絶命？

「ったく…  
もう勘弁してくれよっ！！」

マジでヤバいんだメイドさん相手に命乞いでもなんでもするさ。  
命乞いをしてた俺は小石につまづき、運よくナイフを避けられる。  
そして下からのアングル。

十六夜さんがナイフを振りかざしているのが初めてわかった。  
当然、十六夜さんは空中ダッシュをしながら身体をグルッとねじり、  
尻餅をついてる俺にナイフを突き出す！！！！

「蒼真健！！  
これで終わりですッ！！」

十六夜さんの右手が俺に向かい一線！！  
近くで見ると細くあまりにも頼りない西洋ナイフだな。  
つなこたアどうでもいい。

問題なのはこれから俺の身体のどこにナイフがブツ刺さるかだ。  
首や頭なら一発ぼいな。  
でも胴体だったら苦しくて死ぬかも……。  
そりゃイヤだ。

……いや……。

死ぬの事態、勘弁だ！！  
まだやりてエ事があつたわ。

「これで…  
終わりよオオオオツ！！」

「んな所でえ…  
死ねつかよツ！！！！」

半ヤケクソ気味の右ストレートパンチ！！  
俺の拳は途中ナイフとぶつかり合い、血が吹き出た。  
しかし俺は拳を緩めず、いまある力を全て込め、  
腕を伸びきった！！

「クッ　！！」

十六夜さんは目をつぶり、一瞬硬直した。  
そんなあられもない状態のメイドさんを殴れると思うか！？  
顔面スレスレの寸止めだ。しかし！！  
俺の考えを裏返すかのように拳が勝手に機能した！！

「な、なんだこりやあああつ！！！？？」

「なに…この力はっ？」

俺の右腕は蛇のようにうねりだし、  
まるで言うことを効かない!?

自分の右手がだぞ!?

更に拳は蒼白い光を放ち、閃光のように十六夜さんへ向かった!!

「蒼の光!!」

まさかッ!!...キャアッ!!」

「十六夜さんッ!?!」

殴ったのではない...

俺の右腕が急に強く光り、その光によって吹き飛ばされた!!  
十六夜さんは飛ばされたと同時にバックステップを踏み、ダメージ  
を最低限に抑えたようだ。

光りを放った右腕はやがて普通に帰っていく。

俺も立ち上がり、十六夜さんの所へ駆け足で向かう。

「十六夜さんッ」

大丈夫でしたか!?

すいません...なにか右腕がおかしくて.....」

「ええ...平気よ.....」

「怪我...ありませんでしたか...!!?!」眉をひそめ質問するが、

十六夜さんはクスツと笑い、

「フフ…

おかしな子ね。

私はついさっきまであなたを殺そうとしていたのよ?」

「ハハ…

ですね……」

俺も笑う。

しかし十六夜さんは笑みを直ぐに崩し、

真剣な眼差しで俺を見つめた。

まさかまた「殺す」なんて言わないよな?

「蒼真健ツ…!!」

「は、はい…?」

「あなたは有資格者だわ

私と来てくれるわね?」

すまん。

どこにつすか?

とゆーか来てくれとか以前に学校行かなきゃなんないンすけど……

「来てくれわね?」



十六夜さんはもう一声、同じ台詞を繰り返し俺に聞く。

「どこに行くんですか？」なんて質問を返そうと思ったら、目の前にいきなり二つのリボンが現れた。

リボンは上下遠間隔で別れると、その間に黒い隙間が出来る。  
っへ？

どうゆうこっちゃ？

「とにかく…

私と来てッ！！」

「なっ…

説明くらいして…」

腕を掴まれ無理矢理

黒い隙間に投げ込まれた。

変な感じだ。

入ったときも入っている今もまるで水中にいるみたいだ。

もちろん呼吸は出来る。

四次元ポケットとかこんなかんじなのかな？

「蒼真健…

今から落ちるわよ。

しっかり掴まってなさい」

「どこにだよ！？」

ツツコミを入れた瞬間。

俺の意識はイッツツキに下へ飛んだ。

わかる！！

水中で落ちているのがわかる！！

水圧の勢いで唇がめくり反り、耳や鼻が潰れた。

暗い水中の中を猛スピードで落ちていき、やがて一つの光が見えた。

…

「いてっ！！」

「ほっ」

隙間は地上50cmくらいから俺らを吐き出す。

十六夜さんは慣れたかんじに着地をするが俺は当然、頭から無残に落ちた。

「いたたたた…つう…  
っん！！！！？」

強打した所を撫でながら、起き上がり当たりを見渡す。

……………おいおい

嘘だろう？

一体なんの冗談だ？

まるで大海を思わせる蒼く澄み渡った大空。

地平線まで広がった綺麗な大自然。

俺は自分の目を疑ったよ。

…いわずもがな

朝に夢で見た草原だ！！

俺は携帯を取り出し、

画像フォルダ内をくまなく探す。

……………ッッ！！！！

やっぱリッ

朝も今も…………

夢じゃねエッ！！！！

青空いっぱい広がる携帯画面を見つめながら確かに確信した。

「綺麗なところでしょ？

日本じゃめったに見られないわよ。

ヤケにリアクションが薄いじゃない…？

景色には興味ない？」

「あア…前に似たような場所を見たことがあったからな…  
それよりドコだよここは？」

「ふうん残念ネ  
こーんな綺麗なのに」

十六夜さんは腕を後ろに回しクルッと一回転すると  
俺の顔を下から覗き込んだ。

「ンなこたア良いつて  
ドコなんだよ？  
ここア？」

「『ゲンソウキョウ  
幻想郷』。

忘れ去られた者がくる場所……  
人間界とは違う異空間にできたいわば謎空間  
私達の住む場所よ」

「げんそう…きょう？」

正直なにが起きているのか、なんのことだか…  
何一つ俺がわかる術はなかった…。  
十六夜さんの態度の変わり方も……  
さっきまで血相変えてナイフを振り回していたのに…

あの蒼い光を見てから……。

「さっ行きましょうか」

「毎回そうだが…

アンタ説明力が足りてねエよ。

いったい何処になにしに行くんだ？」

「ひ・み・つ

と、いいたいところだけど

そろそろあなたにも説明が必要のようね？」

いたずらに微笑み指を指す。

俺は十六夜さんの指す方に振り返った。

…？

なんだいありゃあ？

「どう？

見事にミスマッチしてるでしょう？」

紅く…

そして巨大な洋館がふもとに大きく佇んでいる。

そこからはまるで負のオーラが溢れ、禍禍しい妖気がこれでもかと出ている。

そして十六夜さんの言つとおり、  
血液の様な紅と、  
海の様な蒼、

そして緑……

本っ当に”ミスマッチ”だな……。

「ふもとまで降りて  
あのお城へ行くわよ…  
わかったわね健？」

「おっ、おオ…」

急に下の名前ってなかなかテレんな……。  
ともかく、行く場所はわかった。  
（目的はわからんが）  
もう少し、コイツにつきやってやるか。

二人して広い草原を一步、歩きだした。

## 第二話 犯罪者に悪者のイメージが無いのは俺だけか？ トンガリとか、いい！

作品とは関係ない話。

私はものスゴクたくさんのおんちがあります。

- ・機械おんち
- ・方向おんち
- ・運動おんち
- ・音痴
- ・味覚おんち
- ・金銭感覚おんち

あれ…

前が霞んできた。

俺って普通にダメ人間じゃね？

もうダメだ…。

鬱だ…、いつそ楽に… W W

でわ次回掃魔の剣

第三話お楽しみにっ

### 第三話 石橋はバスーカで撃ってから渡れ（前書き）

始めに更新が少しばかり遅れてしまったことを謝罪します（泣）

待っててくれた皆さん

本当にありがとうございます。

ではどーぞ



### 第三話 石橋はバズーカで撃ってから渡れ

例の草原から数キロ程離れた林：  
んっいや、樹海かな？

十六夜さんに言われるがまま、あの紅い城に向かって早1時間。  
俺達は木々に囲まれた樹海を歩いている。

…しかし変な感じだ。

俺は昔っから幽霊などをうつかり偶然見かけてしまう特殊な人種の  
わけで、

その性格のせいかな

樹の一本一本に強い意思を感じる。

植物が感情という厄介なモンを持ち合わせ、

今にも動き出して殴り掛かってきそうなの…

まア不気味ってこった。

イメージ的には入れ墨者に無言で囲まれた感じ。

途中、不可解な疑問が俺の中で静かに産まれた。

そこからかなり歩いたはずだ。

しかし道のりは全く同じのパターン化した登り道と下り道の連鎖だ  
け。

それだけではない。

辺りの風景が変わっていない気がする。

樹に走ったあの大きな傷、

垂れ下がったあのツタ  
何回も同じモノを見ている……。

なにより”あそこ”からみた時には上からとはいえ城はかなり近く  
に見えた。

それが全えん然、近付く様子もなく、

俺は楽しそうに肩をフリフリ動かしながら歩く十六夜さんの背中に  
声をかけた。

「なア十六夜さん」

「なアに?…健?

あと、咲夜で良いわよ

私も下の名前で呼んでるしね」

咲夜は嬉しそうに言うが、

俺の疑問から起きた虫酸はいつこうに消える気配を見せない。  
そりゃそうだ下の名前で呼ぶ事を要求されただけなのだから。

「いくつか質問があるンだが…」

「ドーン」

そのテンションで通すつもりか？  
合図のように軽く手を上げる。

「さっきからさア…

同じ道ばっか歩いてる気がすんだけど…？」

「気のせいね。

森になれていないからそう感じるのよ。

まあ無理もないわ

アナタの住んでいた”神奈川”<sup>カナガワ</sup>じゃ山なんて滅多に行けないもの」

「あらかじめ台本にでも書いてたような台詞だな」

「……………」

図星、か……？

咲夜は黙ったまま早歩きになる。

絶対になんか隠してやがんな…。

この時、俺の微細な脳みそは

『命の危機 常識！？』という認識を行ったのであろう。

自然と息は荒れはじめ、

咲夜の肩を握り、

近くの樹にたたき付けた。

「なにを…ッ  
いつたい俺になにをする気だ…ッ!!」

「特にこれといったことはなにもしないわ。  
ただ”ある人”と対面させただけ…  
ほんのちよつと前に言っただでしょ？  
私は”ある人”の命令で動いているの。」

自分で言うのもおかしいが、  
咲夜は怯える様子も見せないで冷静に答える。  
確かにここで咲夜のナイフが飛べば  
一瞬でケリは着くのだから……  
俺に脅しの術はない。

「ハア…ハア…ッ!!  
頭が狂っちゃう…  
なんなんだよ!?!  
この世界はッ!!!?」

「幻想郷…  
他に呼び方はないわ…」

「ハア…  
で、あの城いつて何すんだよ?  
俺アフォークダンスなんか踊れねエぞ!?!」

「フッフ…私も」

咲夜は俺の両手を払い、  
人差し指で一回、俺の胸をツンとつつき

「クールダウン  
オッケー？」

「ハッ… ハアッ…  
…… イエス」

なにいつてんだかサッパリだが、  
意味はわかった。  
俺は手を下ろし  
心を落ち着かせるために深呼吸をした。

「わかった…  
少し取り乱したな…悪い。  
痛くなかったか？」

「平気よ。  
じゃ、行きましょ」

そこから更に数分後……

しかし……

問題はまたコイツが襲い掛かないかどうかなんだよなあ……実際。

俺も俺でなんか超危険人物っぽいから人の事言えねーけど。

さっきまで俺の事を犯罪者扱いしてナイフぶっ飛ばしやがって……、  
それともあの城に行ったらいわゆる”咎追い”とか言う奴らがいっぱいいたりして……。

「ほオラ

見えてきた」

咲夜は嬉しそうに樹の隙間から見える紅い城を指差した。  
だけど城はあまりにも遠くにあるので俺は言ってやる。

「あア？

まだ全然遠いじゃねーか」

「だから言っただじゃない。  
見えてきたって。

誰もあと少しなんて言っていないわよ？」

……………。

まア確かにそれは正しいが、もうちょっと近くに着いてから言っ  
てほしかったな。

もう足がガクガク

俺達は密林、いや樹海の中を歩き、  
山を登り降りと、

そりゃあもう大変な訳で……。

そんな中で「城が見えた」など、砂漠でオアシスを見つけたに等し  
いんだぜ？

ところがどっこい。

オアシスは遠くにポツンと見えるだけ。  
詐欺だ。これは。

そこからかれこれ2〜3時間、

俺達はくだらない談笑をしながら足を運んでいく。

やがて木々の隙間から紅い壁が見えた。

森の終わりさ。

俺は息を切らしながら

「終わったー」と声を発すると、

隣の咲夜が涼しげに「だらしないわねえ」

と笑みを見せる。

んでもってこの高く大きな紅い洋館。

なんで西洋の屋根は先が尖っているんだ？ 風習？

城はこの世の果てまだあるんじゃないかヤケに立派な城壁に守られている。

付近には大きな湖があり、時偶ポチャンと音を発て飛沫を飛ばす。  
森から出て門辺りまで行くと緑色のチャイナ服（！？）に身を包んだ人が地べたに直で倒れている。

……ッ！？

やばくないかそれっ！？

俺は慌てながらその人の所まで走った。

「ちよっ……」

おまつ、大丈夫かー！？」

体をゆすつても

返事すら返ってこない。

俺は背中に大量の鳥肌が立った。

「咲夜ッ！！

救急し……」

「救急車」を要請しようと振り向いた瞬間、



咲夜のナイフが俺を通り抜けチャイナの人に突き刺さった！！  
少量の血飛沫を被り一瞬、頭が働かなかった。

…え、ええええっ！？？？

咲夜さん！？

アンタなにしてんのオ？？

「美鈴…

起きなさい……」

俺でもギリギリ聞こえるくらいの小さな声でつぶやくと、

俺の腕の中で死んだ”美鈴”<sup>メイリン</sup>と呼ばれる女は疾風迅雷の如く起きて

立ち上がり、

咲夜に一礼をする。

「寝てませんっ！！

本日も異常なしです咲夜さんっ！！」

……えっ！？

チャイナ服は腰まで伸びた赤い髪の毛をなびかせながら咲夜に再度  
頭を下げる。

頭を下げっぱなしのチャイナ服に咲夜は無言で近付き、耳打ちする  
ように。

「私にはどうしても寝ていたように見えたケド？」

いや、寝てたよ。  
チャイナ服は素直に

「すみませんでしたっ」

と、必死に謝る。

すると咲夜は穏やかな瞳でチャイナ服の肩を掴み、

「門番…

大変なものね…？」

「いつ、いえ…

そんなことは……」

俺はその場で動けなくなり二人を見つめることにした。  
チャイナ服は小鹿のように肩を小刻みに震わせて  
目に涙を浮かべている。

対し咲夜は水平より低い位置にあるチャイナの後頭部を優しく『睨  
み』つける。

「寝ちゃっても…

サボっても…

しょうがないんでしょうね？」

「そ、そんなことは…」

「もう、良いわよ…」

「そんなっ…」

咲夜さん……っ」

「シフト…

変えてあげるから…

休暇でも取りなさい…」

「咲夜さんっ…」

………。

なにこの茶番劇…？

チャイナ服は嬉し涙を顔に浮かべ、頭を上げる。

咲夜はニツコリ笑うと両手を広げ

「さア抱き着きなさい」と言わんばかりに首を傾げた。

この状況下ならもちろん

チャイナ服も両手を出し咲夜に飛びつく。

瞬間。

咲夜の両手はチャイナ服の背中でクリンチされ

そのまま身体をえびのように後ろへ反った！！

う、裏投げエツ！！？

チャイナ服の頭は勢いよく

茂った地面に叩き付けられ、そのまま硬直してしまった。

………。

死んでないよな？

「あの…

咲夜さん……？」

「さっ　行きましょう」

「行こう」　つか

一人「逝った」んすけど…

咲夜さんはうつすら笑みを顔に浮かばせながら気絶したチャイナ服を踏み付けにして  
バカみたいにでっかい門を指パッチンで開ける。

うん、指パッチンしたら自動ドアみたいに勝手に開いた。

門をくぐり、

出た先には真っ赤な華で埋め尽くされていた。

門から城まで優に50メートルはあろう、

辺り一面に紅い薔薇がこれでもかと咲いている。

薔薇道を歩き扉を開くと、

またもバカみたいに長い廊下や螺旋階段が出現。  
歩いてる途中、俺は咲夜に話しかけた。

「スツゲエ豪邸だな」

「ええ

幻想郷内なら一番大きな館だもの。  
外の薔薇、綺麗だったでしょ？」

「あ、ああ

確かにすごかったな。  
城の主人の趣味か？」

「そうね。趣味かしら。

あの薔薇、アタシ一人で手入れしているのよ」

ほう。

あんな量の薔薇を一人で育てるなんて…  
外に広がる薔薇を思い出してあらためて感心する。

そしてもう一つ質問をする。

「あのチャイナ服…

誰なんだよ…？」

てか生きてんのか？」

「あの子はココの門番をしている”紅<sup>ホン</sup> 美鈴<sup>メイリン</sup>”よ。

最近サボり癖がついてるから少し厳しくお仕置きをしているの」

なーるへそ。

咲夜は「やれやれ」

と首を振りウンザリ顔で説明をしてくれる。

今考えたらあのチャイナ服に変な名前…

アイツ中国人かな？

えっ？

なぜ急に上の説明を入れたかって？

隣で咲夜がうつとりしながら

「まあ半分はストレス解消で、これがまた楽しいのよ。

あっ！！ 最近”ふらんけんしゅたいな”って技を覚え……」

こんな事を言い出したからさ。

これ以上 聞きたいか？

無論、俺はそれが却下な訳で…

そこで咲夜の足はピタツと止まり、俺も足を止めた。

目の前には紅く金の装飾が一面に広がった大きな扉がある。

いったい某鑑定団に調べさせたら値段の方はいくらに成ることやら。  
ドアノブだけで15万はするな。

そしてこの先に俺に会いたいつつー奴がいるんだな……。

まさかアホみたいな格好した髭のオッサンが

「私はおまえの父だ」とかくだらねえ話じゃあるめエよな？

それか紅をモチーフにしたこんな城に住んでんだ。  
吸血鬼とか？

咲夜は扉をトントンと軽く叩いた。ノックだ。

《 入りなさい 》

「ーッ！？」扉の向こうから、  
ではなく

脳に直接、女性の声が響いた。  
くっ… 耳鳴りがする。

この事を隣の咲夜に質問をしたくて「おいっ」と、無下に呼び掛け  
たら

咲夜は無言で人差し指を突き付けた。  
黙れっつー事か？

「健開くわよ」

「はあっ？」

扉がまたも自動で開く。

開いた先にはパーティーホールの様に広い空間があり、その全面に

紅い絨毯ジュウタンが敷き詰められている。

ここに来てから俺に『常識の範疇』という言葉は一切通用していない。

バカ広れえ！

そして遠目ながら紅い絨毯の真ん中にテーブルと椅子が見えた。そして椅子には誰かが座っている。

座っているのはまたもオタク共のはしゃぎそうなゴスロリな服装をした小柄な少女だった。

しかしその少女はどこか近寄りがたく、威嚇をした猫のように立ち回る隙もない。

ホントにガキか？

俺と咲夜はそのテーブルまで歩いていく。

見ればアンティークだが

ヴィンテージだか知らないが、それっぽい感じのテーブルに王族とかが使ってたそうな豪華な椅子。

貴重品っぽいティーセットで優雅に茶をたしなんている。

この一式だけで俺ん家が買収できそうだ。

上からそのガキを眺めながら、

「あの……」

口を開いた瞬間、

”レミリア嬢”は



「上を見ていたら首が痛いわ。うっとうしいのでさっさと座りなさい」

と嫌味混じりの命令口調で椅子を指差す。

すると咲夜が無言で椅子を引き、「どうぞ」と手をだした。

なるほど。

咲夜がメイド服を着ているのはココのメイドをやっているからか。

俺はその豪華な椅子に着いた。

座ってからレミリアと目が合った。

「貴方が蒼真健：ね。

咲夜にやられた右手の傷はもう良いの？」

紅茶を飲みながらレミリアは俺に聞く。が次いで咲夜が…

「いえ、お嬢様

止血の方は私が済ませてありますので…

心配のほどはないかと」

いつお前が治療をしたよ？

咲夜に止血を施してもらった記憶など微塵もないが  
ナイフで刺された右手から血が一滴も出ていない。

「あら咲夜

私がいつアリンコの心配なんてしたのかしら？」

誰がアリンコだ！

すこしくらい心配しやがれ！

レミリアは小さくため息を漏らし、紅茶に手をかけた。

んっ？ レミリア？

いつの間にか名を出してるけどだれだよそれ？

なんで俺は初めて見たコイツの名前を知っているんだ？

テンパリながらもその小娘<sup>レミリア</sup>に声をかける。

「おいっ

なんで俺はお前の名前を知ってたんだよ？

あと右手の傷、これだってついさっきにつくった傷だぜ。

（第二話参照）

なんでアンタに情報がまわってやがる？」

よく見たら右手は出血どころか傷すらない。

よくわからないがああ”蒼い光”が関係してんのか？

『咲夜の止血』ってのにもわか信じられないし…

レミリアはそんなことはどうでもいいと手を払い、紅茶を一口飲む。

「はア…

呆れたわ。まさかこんなバカが幻想郷の未来にかかっているなんて……  
ましてや世界超一級犯罪者？

罪はなに？ 痴漢？」

まず説明をしゃがれ。

ンのクソ野郎。

てか痴漢で世界犯罪者って逆にスゲーな。

「口も汚い」

レミリアはつぶやく。

心の中を読むな。

はぁ、とため息をして

レミリアは俺に指を突き付け言った。

「いいこと？」

私と会話がしたいと少しでも願うなら

まず敬語をつかいなさい。

そして私の意見には死んでも逆らわない。

最後にどんな状況下でも私にはへりくだりなさい！！」

なんつー自分勝手。

「初めまして」も言わせないで何をペラペラと…。

それよかテメエが話したいっつーから咲夜をコッちによこして俺を連れて来たんだろーが！

「……わかりましたよ」

「で、用件はなに？」

しぶしぶコイツの言う通りにしたが、  
スッゲーむかつく。  
なんでガキに敬語を使うんだ？

「あのお…」

まず自己紹介からあ…

おれ…あっ！

自分は蒼真 健と…」

「いないわ。」

言葉を切って退屈そうに頬杖をつき  
ぼーっとどこかを見つめながら、

「だいたい私の名前はワカっているはずよ。  
まあミジンコ程度の脳みそしかない貴方が  
それでも自己紹介が必要と言ったってたら私が良い医者をお方に紹

介してもよくってよ?」

いっちいちカンに障る言い方しやがって。  
ウマくねえんだよ。

そーいちゃあなんでか  
コイツの名前がちゃんとワカっている。

”レミリア・スカーレット”  
この”<sup>コウマカン</sup>紅魔館”の当主。

……………。

さっきの頭ン中に直接、語りかけるようなアレをいつの間にかやら  
れてたってか?  
訳わかんねエよ。

「次の質問はいいの?  
鈍臭いってイヤなモノね」

レミリアがまたも嫌味。  
咲夜は空になったレミリアのカップに紅茶を注ぐ。

「なんで俺は幻想郷に連れてこられたンだよ?」

「ふう…」

適応力が低いのも嫌ね。

それと私に向かって『たんだよ』とはなんなの？

貴方 台詞にちよくちよくカタカナが混ざっているけど…  
格好の良いつもりなの？

読みづらいわ。

やり直し。」

レミリアの毒舌は多分世界のなによりも傷つく。

結構意識しながら喋ってたんですよ僕。

そのあと二回ほど言い直ししてから、

やっとレミリアは言う気になったのか、

ちよつと顔が真面目になる。

「20XX年。

どこかの妖怪が退屈凌ぎに幻想郷と貴方達の住んでいた神奈川を一つの空間にしてしまうのよ。

簡単な話

幻想郷と神奈川、誰でも自由に行き来出来る世界になるの。

そして神奈川から日本へ、日本から世界へと

幻想郷の存在は認められ、やがて合併という形になったわ。

私達には和平条約意外に得は一つも無かったのだけれど、

世界にとって幻想郷の文化や技術はとても魅力的だったんでしょう。  
私達の生み出した『能力』や『魔法』は全て真似され更に機械的改造の導入。

最初は強い位置にあった幻想郷だけど一年もしない内に幻想郷と世界の戦力は掛け離れ……。」

「世界が幻想郷に攻撃を仕掛けた……か？」

話内容を把握するため

俺は言葉の続きを予想し聞いた。

レミリアは

「そう」と少し呟く。

しかしおかしくないか？

話の現状では世界が幻想郷を攻撃してもなんのメリットも無いはずだ。

戦う理由が存在しない。

「『不の遺産。』」

世界は私達をそう呼んだわ。

全てに発達した私達は世界にとって邪魔でしかなかったのよ。だから攻撃された」

意味がわからねエ。

だいたい今話しているのが『世界の未来』って実感なさ過ぎたる。

「……戦争中、

そこで貴方は罪を犯す。」

「はア？」

これしか言えない。

俺にはレミリアの未来予告など理解できないんだ。

罪は？ 罪状は？

探せば質問は100通り位あるんだが、とりあえず。

「で、なんで俺は呼ばれたんだよ？  
まずそれを聞かせろ。」

俺は紅茶を一気に飲み、

レミリアに真剣な眼差しを向ける。

対しレミリアは表情を変えずに、

「貴方は罪を犯す。

この未来は変わらないわ。

だけど貴方には幻想郷を救うのに必要な力を持っているのよ。」

「……ッ

まさか……？」

刹那。

俺の脳裏に過ぎったのは咲夜に当てた『蒼の光』。

あんな非現実的な力……、



「<sup>アオ</sup>蒼”。」

やっぱりッ!!

レミリアの言葉が初めて理解できた。

あの力が…

幻想郷を救うだと…？

「俺に戦えってか？」

不思議な力で世界を救う。

1番に思いつくのはバトルだろ。

「あら、気づいちゃった？  
バトルフラグ？」

「俺ア喧嘩弱いぞ？」

「それくらい知ってるわよ。」

貴方は今 檜木棒を持ったLEVEL1の勇者なの  
だから地道に…」

「スライム倒してLEVEL100になれっか？」

「御名答

じゃ、早速行きましょ」

レミリアは立ち上がり先ほど俺達が入ってきた扉を指差す。  
どこに行くんだア？ 一体？

「修行よ」

俺は楽しそうに上着を羽織るレミリアを見て、  
ため息まじりにしぶしぶ足を動かした。

### 第三話 石橋はバズーカで撃ってから渡れ（後書き）

なんかもうすごく嬉しいことがありました！！

なんとお気に入り登録が早速二件！！

この一步は人間にとつては小さい一步だが人類にとつては大きな一步です。

皆さん感想やコメント気軽に書いてください。

私も作品の悪いところを指摘してもらえると更に良いモノになると信じていますので（笑）

では次回掃魔の剣

第四話 お楽しみに

#### 第四話 雨降ると地面はグツチャグチャ（前書き）

皆さん今更ですが言っておきます。

この作品 掃魔の剣に『ブレイブルー』は一切関係していません。  
”蒼の力”とか”超一級犯罪者”のネタがありますけど…

蒼の力は以前私がハーマン氏に送り付けていた小説の中にありまして…

犯罪者ネタはどちらかと言えば『トライガン』からです。

ブレイブルーはマジで関係ありませんので！

でわ（´、`）／どぞ

#### 第四話 雨降ると地面はグツチャグチャ

おいおいおいおい

修行ってまさか此処でやるんじゃないかなーよな？

レミリアに連れて来られた先は紅魔館の庭先…、

美鈴のいる門前である。

まったく、美鈴の奴はさっきの事（裏投げ）を懲りずにまた寝ていやがる。

このあと美鈴は咲夜にフランケンシュタイナーを実行され、還らぬ者になったのは言うまでもないだろう？

「修行ってココでか？

確かに広いが下が原っぱじゃねーか。

学ランが汚れちまうよ」

「男が服のことなんか気にしないで良いのよ」

咲夜は恍惚の笑みで俺の背中を押した。

慌てながら踏み止まる俺。

そこでレミリアが何か棒状の物を俺に差し出す。

「はい武器」

「武器って…」

木刀じゃねーか！

んなモンより”エス○リヴァー”とか  
”ビー○サー○ル”とか  
イカす武器はねーのかよ？」

急に渡されたのは世界一いらぬお土産ベスト10入りの代名詞『  
木刀。』

まんま木という色をしたなんとも普通なる木刀で、  
しかも握る部分には『洞爺湖』と彫りが入っている。  
まさかとは思うが某白髪天パの浮浪人が愛用しているあの木刀なの  
か？  
だとしたらビー○サー○ルより価値があんじゃねーのか？

「いえ、去年友達に貰ったわ。」

うわっ パチモン。

レミリアは呆れ顔で日傘をクルリと回す。  
俺も半呆れ気味で木刀を見つめる。  
この木刀、去年貰ったわりには傷一つ無くて新品のように光沢があ  
る。

きつとタンスかなんかにしまいっぱなしだったんだろう。これをあ  
げたお友達も報われないな。  
俺は軽く素振りをしてから、

「で、誰と戦<sup>ヤ</sup>るんだ？」

俺の質問にレミリアはクスツと笑う。  
そして笑いながら指を指した。

「美鈴 起きなさい。」

「はいつ！」

なっ！？ 美鈴と！？

無茶言うなよ。

咲夜にやられたフランケンシュタイナーで倒れていた美鈴はレミリアの一言で直ぐに立ち上がる。

「おい咲夜！

俺ア女と戦いたかないぞ」

「あらそれは美鈴のことをバカにしているの？  
健くらいなら”ぴすとり”持ったて勝てないかもよ？」

バカにしてんのはお前等だろーが。  
今年高二の俺が木刀を握ったんだぜ？  
今の俺は多分柔道部の高橋先輩より強い！

「まア美鈴も結構 身長高いしなア……。  
でも俺に武器つてのはさすがにマズいだろ？ 相手は女の人な訳だし？」

「貴方さつきからグダグダと……、  
まさか内心では美鈴に怯えてんじゃないでしょうね？  
見なさいよ。 美鈴はもう準備運動を終えているわ。」

振り向くと美鈴は「さぁドンと来い」っつー顔をして楽しそうに両手を広げている。

まだ修行をする理由も曖昧なんだがなア…、

てゆーか高校は大丈夫なのか？ 大遅刻だろ。

俺は学ランを脱ぎ捨て、

腰周りまでにさげたズボンを引き上げてベルトを締めた。

「ったく……、

死んでも知らねえかなアアアアッ！」

不意打ちか？

俺は飛び出し美鈴に向かって結構ガチの面打ちを放った！

木刀の軌道は美鈴の後頭部まで一直線に弧を描く。

「……うんっ！

根性とやる気は合格

でもそれ以外は…

ッ」

木刀が頭へ向かう途中、

美鈴はなにか喋っていた。

その事実はわかった。

だが、なにを話していたかなんてのは一言も記憶には残っていない。何故なら俺は握っている木刀を振り下ろすより先に紅魔館の城壁に叩きつけられていたから！



「　　っは…！？」

ガハッ…　　ウエツ…！？」

ハッ…！？　　ッ！？」

壁からずり落ちた俺は原っぱの上でのた打ち回った！

なにが…

なにが起きた！？

レミリアと咲夜は意外にも冷たく、苦しむ俺に声すら掛けない。  
そして美鈴は少し落ち着き体育座りでもがく俺に歩みより…、

「聞こえた？」

「……………つく」

質問をしてきたのでとりあえず首を横に振る。

てゆーかなんだこりゃあ。内臓が破裂したかもしれん！  
声がでねえ…！

「根性とやる気は合格。

それ以外はがんばりましょう。って言ったのよ」

「……………つく」

それ以外って何なんだよ？」

言つと美鈴は下を向いてから、その明るい笑みをもつかい見せてくれる。

「傷付くかも…？」

「いいんだよ。

言ってくれ。」

美鈴は更にもう一回 下を向き、少し悩んでから俺を見つめた。

「24回。

これは貴方が私の打撃を受けた数。…まあ今回は当ててないけど  
そのうち23回が間合いからピンポイントに放った攻撃で… 少  
なからず23回は死んでいるよ。

で足りないモノといったら、

観察力、洞察力。

まずアタシの構えを見なきゃダメじゃない。

あなた見ないで突っ込んだよね？

判断力は微妙ね。剣術で1番威力のある面打ちを最初に使うのはど  
ーにも気に入らないわ。

で、瞬発力は生来のモノで鍛えられないって言うケド、あなたはそ  
れに欠け過ぎているわ。

状況適応力。

あなたね、場所がこんなに広いんだから一直線に向かわないの。  
まあ向かったからこそ根性が上がったんだけどね。

他は攻撃力、<sup>パワー</sup>、<sup>ガード</sup>防御力、<sup>グリップ</sup>握力、<sup>スタイル</sup>姿勢、剣術とかの技術面。

ここら辺はビックリするくらい低いわね。

それと実戦じゃないんだから準備運動はちゃんとしなさい。

あと、周りに流されちゃ絶対にダメよ。

確かにレミリアお嬢様は厳しいけど嫌なら嫌って言いなさい。

男の子でしょ？

まあこれくらいかな？

最後にあなたの能力の開花を見るだけだし」

「ど、努力します…。」

「はい、溜め息もつかない。男の子でしょ？」

「そーっスね……」

ヤバい。超傷付いた。

穴があつたら中に入って練炭自殺したいくらい恥ずかしい。  
てか美鈴さんクソ強くなーか？

柔道部の高橋先輩 片手で倒せるもん。絶対。

「じゃあ、あなたの実力もある程度ワカったし  
自己紹介でもしよっか？

いつまでもあなたじゃ呼びにくいし」

美鈴は俺に手を差し出してくれる。

もちろんその白く細い手を俺は握ったさ。  
立ち上がりあらためて顔を見合わせる。

「先にどうぞ」

「あつ、んああ…」

俺は蒼真 健。 17歳だ。」

「アタシは”紅<sup>ホン</sup> 美鈴<sup>メイリン</sup>”

その感じだと咲夜さんに聞いたんでしようけど、  
改めてよろしく」

咲夜もズバ抜けて可愛いが美鈴だって可愛い！

これでもかと放たれるスーパービューティフルスマイルで首を傾げる美鈴の姿は俺の『可愛い』という常識を完膚なきまでに壊してくれた。

この人が師匠か。  
なんて考える俺。

てかこの人で良かった。 うん。 本当に。  
なにより優しいし、丁寧だし、胸でかいし、美人だし、胸でかいし、  
スタイルいいし……。

「でわ健くん、第二回戦イキますか！」

「はいっ！ 師匠ッ！」

「その……  
心意気だああああ」

美鈴は嬉しそうに跳び上がりローリングソバット！  
俺の腹部に想像も出来ない激痛<sup>イタ</sup>みが走る。  
さらにフツ飛んだ俺は壁を突き抜け薔薇園に落ちた。  
壁の残骸と潰れた薔薇はそれはもう無残なモノで。

「咲夜…  
残業よろしくね」

「はい…（泣）」

咲夜、レミリアの会話である。

更に美鈴は4〜5メートルは有ろう城壁を何食わぬ顔で飛び越え、  
バラを踏み潰しながらこちらへ向かった。  
つて！？ 木刀？ どこいった？

「いくよ健くんっ」

「ちよっ… タンマ…  
木刀がっ…」

「もんどー無用っ！」

美鈴の右腕が俺へ勢いよく飛んでくる。  
だけど俺には木刀がないっ！

迷う暇も、避ける術もなく  
とりあえず俺は身体を丸め、目をつぶった。

「はっはー」

そんなんじゃアタシの突きは防げないぞ！  
さっきの根性、見せてみろっつ」

燃えろ！ 俺の大宇宙ッ！！  
「コスモ」

冗談じゃねーよ！

大の男（俺！）を軽くブツ飛ばしたパンチだぞ？  
あんな痛てーの誰が二度と喰らうものか。  
真正のドMでも無理だ。

気付けば美鈴の小さな拳はもう目の前まで迫って来ていやがる。

殴られる覚悟を決めて俺は歯を食いしばった。  
実際それしか出来ない。

その時だった。

俺の身体全体から蒼い光が放ち始め、全身にただならぬ力が沸いて  
きた！

「…ッ！」

「っえ！？」

美鈴の拳をすり抜けカウンターの左アッパーッ！  
俺の拳は美鈴の小さな下顎を捕捉<sup>トラ</sup>え、  
その身体を上<sup>ト</sup>に殴り飛ばした。

誓ってもいい。

その瞬間、俺はなにも考えてはいなかった。  
完全なる無意識の状態<sup>ト</sup>で自然に身を任せ、  
いとも当たり前かのように  
美鈴の顎を打ち抜いたのだ！

左手に残る感覚を余所に、  
俺の身体は動かなくなっていた。

#### 第四話 雨降ると地面はグツチャグチャ（後書き）

紅魔館の薔薇って美鈴が手入れをしているらしいですね。  
すいません。

おもいつきり間違えましたね。

でわ次回掃魔の剣

第五話 お楽しみにっ



第五話 長い物には巻かれる。アナコンダとか……まあ絞め殺されるがな（前

更新が遅れました。

待っててくれた皆さんスイマセンm（——）m  
そしてありがとうございます（、、（

でわ本編始まります。

第五話 長い物には巻かれる。アナコンダとか……まあ絞め殺されるがな

俺は何回も宙返りする美鈴を目で追うことすら忘れ、  
殴った拳に走る痺れをただ感じていた。

そう。

殴ったんだ。

俺の頭の中で自分の力に対する『疑問』と『歓喜』が一斉に現れ、  
抱き合ったかと思うと急に激しく回りはじめた。

そして

溢れ出すように身体から漏れる光に包まれ、  
なにか好奇心が生まれた。

「……」

どうなるんだろう、と

先の好奇心で上げっぱなしにしていた左手を下に振るう。  
瞬間

レミリアが声を張り上げた。

「咲夜アツ!!」

「わかっています」

レミリアの声と共に咲夜は壁を飛び越え俺に直進してきた。

その時に俺は自分の世界に入っていたんだろう。  
咲夜が何を言いながら走って来たのか、覚えちゃいない。  
ここで俺の記憶はバツサリ切られてしまった。

.....

それから俺が目覚ますのに時間は大してかからなかった。

俺の身体の背面全てにはしるムズ痒いこの感じは今日二度目だ。  
その感じには今朝と違って痛みまで含まれていた。  
痛みの正体は薔薇の棘だと直ぐに気付き、目を開く。

どうやら俺は頭を強打したらしい。目を開いたまでは良いものの、  
激しい頭痛がしてきた。

そして頭の中を過ぎる疑問と同時に、俺の視界へ三つの影が飛び込んできた。

三つの影とはモチロン言わずもがな咲夜、美鈴、レミリアの三人。  
俺は頭を抑えながら直ぐに起き上がって聞いた。

「あの……」

「言わなくて良いわ。  
言いたいことはわかってるから。」

俺の言葉を切ってレミリアは言った。

次いでレミリアの後ろにいる咲夜が言う。

「これが貴方の力よ、健」

「……これ…が!？」

一応、口には出してみたものの、俺にはなにが力なのか理解が出来ていない。

とりあえず右手をグーパーして” なにか ”を確かめる。

わかるわけがない

だって” 蒼 ”と名前だけで、実際に咲夜戦で使った時は存在すら知らなかったんだぜ？

ましてや今だって意図的に発動したわけじゃないし、使い方も意味もわからない。

さらなる疑問が俺の頭を駆け巡る。

第五話 長い物には巻かれる。アナコンダとか……まあ絞め殺されるがな（後

次回に続きます。

番外篇 地上最強の称号（前書き）

グラップラー刃牙とのコラボ（！？）です。

まあ戦った日時は幻想郷に来てから二日目の昼くらいっすかね。  
健くんが少し強いですww

では始まりまーす

## 番外篇 地上最強の称号

鳥は楽しそうに囀り、周りの草木もまるでこの暖かい太陽を喜ぶかのように風に揺れ、歌っているかのようにだった。

俺こと蒼真 健もその陽に当たり、緑の上でひなたぼっこをしている。

太陽の光に包まれて、あまりの気持ち良さに俺のまぶたは閉じようとしていた。

その時だった。

男が俺の前に現れたのは。

「うつ……アアアアアアアアアアアアッッ!!」

第六感、虫の知らせ、なんと言っているかわからないが、俺の身体の中にある何兆個もの細胞が、脳に、身体に、この森に…… いや幻想郷に、危険を伝えた。

俺は自分の自我が保てない程、その男に意識を持って行かれたのだ。自分でも気付かぬうちに立ち上がり、吠えて、腰に下げた木剣を抜き、ソイツの顔に切っ先を向けた。

男というよりは雄。

ソイツからはただならぬケモノ臭と、ケモノにも勝る”気”が放っていた。

雄は、黒い服に身を包まれていた。

上は半袖。下は長ズボン。靴は革靴とも違う見たことのない黒い靴。

そして取り分け異彩を放つのは、ライオンの鬣たてがみのように逆立つ雄の髪かみの毛。そして袖の先から覗かせる2？ペットボトルでは済まない太さの腕。

その筋肉は金剛石ダイヤモンドのように光沢を放っていた。

よく見れば首、肩、胸、腕、腰、脚の全てが異常なまでに発達している。

そんな男が何故、俺の前に現れたッ！？

俺は混乱の極みに達していた。

「クスクスクス……」

初めてその雄は口を開いた。俺は今、初めてその男の顔を見る。嘲笑わらっていた。

目尻は下がり、口角は上がり、頬にはシワが寄っている。小さな事だが確信した。

この悪魔のように異彩を放つ雄にも感情がある。それだけなのだが何故か俺は救われた気がした。

雄は俺の向ける木剣の切っ先を握り、

「アホウが。クスクス」

雄は笑いながら、いとも当たり前かのように木剣を握り、”破壊”した。

ただ握っただけ。特別力を込めた様子もなかった。

雄は、まるで俺らにんげんが握手をするような感覚で、木剣を破壊して退けたのだ。



この有り得ない世界の更なる有り得ない現象に、蒼真健の脳はまともな判断が出来なかった。

行動爆発。

虫や動物、知能の発達しないモノが自分より圧倒的な強さを持つモノを前にした時、初めて起こる行動である。

その行為は自棄糞というのに相応しい。

絶対に勝てない相手の意表を付き、攻撃する。

ではなく。判断直後に攻撃する。

その攻撃は人体の反射を大きく上回る疾さで繰り出され、敵はこの攻撃を避ける事は許されない。

健が放つ大振りの左ストレートは、雄の掴んでいる木刀を破壊し、トラス状に顔へ向かった。

「邪ッッッ！！！！！！」

「ッッ！！！！！！」

拳は男の鼻を掠めた。が、同時に健は地面に叩き付けられ、ゴムボールのように跳ね回り、転がり、草木の中に身が隠れる。

人間の反射神経を大きく凌駕するケモノの反応。

雄は一息つくと、悠々その場から立ち去ろうと歩きだす。

しかしその足はピタッと止まり、先程、蒼真健が飛んで行った方向に首を向ける。

雄は密林の中で気絶する健に語りかけた。

「いゝ疾さだっはやたぜ小僧。次会う時までその腕を磨き、日々精進し

ろ……ッッ！！

次に貴様が俺と対峙する時に喰うに値する存在と成っていれば……  
そんなときゃあ喰ってやるぜ……ッッ！！！！！！」

雄は振り向き様にニヤ／＼と笑うと、

「　雅ッッッ！！！！！！！！」

と咆哮を上げる。

その威力でか雄の目の前に大きなひび割れが現れ、雄はそのひび割れを殴り壊して、その罅跡に入って行った。

罅と一緒に雄は、

その空間から消えた。

先の空と一変し、空は黒くなり、雲が太陽を隠し、豪雨が降り注いだ。

雄弁な……。

その雄弁な一撃に何時か勝とうと決心を誓い、健は雨に打たれ、その場に倒れ込んだ。

番外篇 地上最強の称号（後書き）

友人に言われて、バトル時は第三者目線に書いたんですけど……  
うゝむ……

わたしにバトルって向かないんですかね？

でわ次回もお楽しみにっ

## 第六話 宇宙（そら）と紅魔と時々うどん（前書き）

またまた更新が遅くなりました。

待っていてくれた皆さん。本当に感謝します（、、ゞ  
ではゆっくりしていいね

## 第六話 宇宙（そら）と紅魔と時々うどん

咲夜は凜とした顔で俺を見つめる。

咲夜の前にいるレミリアも、後ろにいる美鈴だって同じ顔をしていた。

しかし三人とは違いまったく理解できていない俺は眉を歪めて、再度聞く。

「力ア!？」

「そう ” 力 ” よ。」

貴方に秘めた、貴方だけの力……!!」

レミリアが日傘をクルリと回しながら言った。

先ほどまであんなに楽しそうにしていた美鈴も、少し真面目な顔になっている。

力？    なんだそれは？

そんなことより学校は行かなくて平気なのか？

それ以前に俺は現代（!？）の神奈川に帰れるのか？

いまさら、

そんなことを考え出す。

現実逃避かもしれない。

いや、このファンタジーで有り得ない世界（幻想郷）が現実逃避した結果なら、

俺はいったいどこに逃避したら良いのか？

そしてもしもこれが現実だと言うなら、何故俺なんだ？

柔道部

の高橋先輩じゃダメなのか？

……と、まあグダグダ言ってみたが、心底いまの状況は嫌いではない。

某少年漫画などでよくある内容なんだが、普通な主人公がいきなり有り得ないことに巻き込まれて直ぐに戦っちゃう。

こういった漫画を読んで俺は「ありえねエ」より「うらやましい」のが感想に出ちゃったりする人なのだ。

結果は変わらない。

さっき言った通り、いまの状況は嫌いではない。

このあと俺はいままでに体験したことのないスリルを味わうんだろ  
うと、ワクワクしている。

俺はふざけた感じ聞いた。

「このアブノーマルな世界に来た俺は……

運が良いと言うべきなのか？」

レミリアが答える。

「悪いわね。

スッゴく悪いわ。

ワタシ的にも貴方的にも」

どういう意味だ。この野郎。まあ聞かなくてもわかる。多分、俺は  
これからとてつもなく危険な目に合つて、拳げ句の果てに”DE  
AD Or なんちゃら”（英語苦手なんだよ）の世界名手配までされ  
る。

ワタシ的にも、とは、まあレミリアは俺を生理的に受け付けない。  
と、いったところだろう。

とりあえず聞く。

「で、俺の能力って どわぁっ!!?」

聞いた瞬間、俺の顔に目掛けて一線。見覚え抜群の細いナイフが飛んできやがった。なにしゃがるっ。

俺はよろけながら接近するナイフに向けて右手を突き出す。

その一瞬の合間に俺は、手からほんのちよっぴり出血するくらいなら……と、小さな覚悟を決めた。

だが……、

バチイイインッ!!

その覚悟は無駄となった。うむ、良い結果と言えよう。

当たると確信した同時に俺の右手から強く光る蒼白い光線が発され、耳を聳する強い音が鳴り響いた。

その大きな音はこの幻想郷全体に広がったのではないか、レミリアもあまりの五月蠅さに耳を塞いでいる。

咲夜、美鈴は微動だにせず、俺の目の前まで歩いてきた。もちろん咲夜には言ってやる。

「てンめエっ!!」

なにしゃがるっ!! 危うく死ぬところだったじゃねーかつ!!」

デコに怒りマークを張り付けて、俺は咲夜に指を突き付けた。

咲夜は笑いながらしゃがんで、なにかを拾う。

「でも死ななかったじゃない。らっきーね

ほら……」

なにがラッキーだか。

咲夜はしゃがんだまま俺になにかを見せる。  
んだこりゃあ……？

「ナイフよ。  
アタシが今 健に向けて投げた……」

俺に見せたモノは、ナイフというより鉄の塊と称するべきであろう、  
謎の物体。まだ角はあるが、丸まっている鉄の塊。  
手渡されると案外軽い。  
見た目ほど重くはなかったな、まあ元はナイフだし。

「ナイフつつつても  
なんでこんなに潰れて……ッ!!」

「気付いたみたいね。  
それが貴方の能力!!」

レミリアは喋りながら悠々、コッチへ近づいて来る。

能力？

これが”蒼”なのか？

「いいえ。

それは”蒼”とは別なモノ」

「健くんってば幻想郷に来てから、こんな短時間でソレが身につく  
とは、流石だねっ!!」

まああたしの1番弟子だけあるかな!!」

咲夜の後に美鈴もそれっぽい事を言う。



それにしても俺はいつ、美鈴を師匠にしたんだ？

「『宇宙を操る程度の能力』ッ！！！！！」

「宇宙を…… 操る……！？」

咲夜の言葉に一瞬、戸惑いつつも、俺は理解をしているつもりだった。

宇宙を操る程度の能力。

この日を境に俺の手には『理』と『世界』が握られた。

第六話 宇宙（そら）と紅魔と時々うどん（後書き）

キャホー

ついに！！ついに！！ついに！！健くんの能力が明らかになりました！！

ハイッ！！遺影！！イエイ！！チェケラ！！

でわ次回掃魔の剣

第7話 題名未定

をたのしみにっ

第七話 カパパカッパって言ってみ、無理だから（前書き）

内容を詰めすぎて忙しい仕上がりになっていますが、よろしく願  
いします。

でわユックリしてってね

## 第七話 カパパカッパって言ってみ、無理だから

”宇宙を操る程度の能力”……か。

ついさっきまでの俺ならこのぶっ飛んだ能力名に対し、「ないない、それはない（笑）」などとアホな事を口にしただろう。今なら信じられる。

さっきまでは起こること全てわからなくて、現実を見ないで、有り得もしない現実逃避して。

目が覚めたらいきなり異世界に来ただア！？  
んな厨二臭い話を誰が信じて、誰が語る。

しかし現実ハ”コレ”だ！！俺はその能力を受け入れた。

「ふふっ……」

俺の思わず口からこぼれた笑い声に、1番に反応したのは咲夜だ。

「嬉しそうね？」

首を傾げて俺に聞く。

吊り上がった口角を抑え切れずに、そのまま返した。

ああ、嬉しいよ。

まさかこんな規模のデカイ能力とも思わなかったンでな。それに名前からしてチートなのがわかるようなこの能力、今から戦っても負ける姿が思い浮かばない！

「明らか調子に乗ってるわね。」

「まあ健くんも男の子だし、ある程度 超能力にも懂れていたんじゃないですか…？ ……ハハ」

レミリアが呆れた感じに呟いていたが、どうでも良い。美鈴も釣られて苦笑いしていたが、どうでも良い。いまはこの能力に歓喜しよう。

「しっかしまあ」

予想はしてましたけど、ナイフが鉄の塊になっちゃうなんて、見るからにぶったまげた能力ですね」

美鈴がナイフだった物体を手に取り、お手玉の様にひょいひょいと投げる。

やめとけ、ケガするぞ。

「でも潰すのがこの能力の本質じゃないだろ？  
それだったら宇宙なんて大層なモン出さなくてイイわけなんだからさ」

「アラ、良いところに気付いたわね蒼真健。  
大馬鹿だと思っていたけど、案外」

はいはい。アーアー聞こえませうん。

レミリアは本当に驚いた顔をして、ペラペラと自慢話をするように俺を罵る。

この態度はツンデレとして受け取っておこう。

「そう、蒼真健！

貴方の持つその力は ただ潰すだけでは無いの」

と言うと？

「デュアルスキル多重能力ッ！……いや、マルチスキル多才能力とでも言うべきかしら？

まあ貴方のそのアホ丸だしな能力をなんて呼ぶかなんて、アタシが頭を悩ませる事でもないわね。

テキトーに呼びなさい」

なんだよコノヤロ。

能力解説が出来てねーじゃねーか、この幼女！！と、レミリアに言っても仕方ないので、（言い返されて精神ズタズタにされるだけだしな）

俺なりにレミリアの言いたかったであろう事をまとめてみた。

つまり今、発動したこの能力は、俺の宇宙を操る程度の能力の中の複数あるうちの一つ……、ということかもしれん……。

まあそういうことで良いか。

少し考えていると、ニコニコ笑顔の美鈴がまた口を開く。

「まあ小難しい話はその辺にしまして、改めて健くんの能力を見てみましょうよ！？」

レミリアは、

「そういえばまだ修業中だものね」

次いで咲夜も、

「”今からでも負ける姿が思い浮かばない”って豪語してたしね！？」

二人に押された俺は……

「痛いから、やりたくない」「よしっ　じゃあ健くんっ」

有無を言わせず、俺の言葉を切って、はち切れんばかりの笑顔で「健くんっ」なんて呼びやがった。

コイツがこの顔で「健くんっ」と嬉しそうに呼んだ後の言葉は決まっている。

続き……。

「続き……」

「いつきますかー！あつと。」

「いつきますかー！」

はち切れんばかりの笑顔のまま、美鈴は俺に最短距離で突進して来る。

つまりは真つすぐ。

そして天使のような笑顔が急に歪み、美鈴はニヤケつくと、先に潰したナイフを、ほぼ零距离の位置から投げ付ける。

狙いはもちろん顔面だ。

「いいい……ヤアツ……！」

という掛け声と共に、鉄球（！？）は俺の顔に当たった。

勢いで3回転ほど後ろへ転がり……いや、意識がまたも彼方へブツ飛んで行ったから記憶が曖昧かもしれない。もしかしたら200回転はしていたかも。

当然、転がったのだから薔薇はグシャグシャ、見るも無残な光景に成っていたさ。咲夜、本当に申し訳ない。

「ほらア次いくよー」

ほとんど意識がなく、完全降伏　土下寝　状態の俺に向かい美鈴は

ダッシュジャンプからの右ストレートを放つ。

あり？　　なんかデジャヴユ？

美鈴は油断したいのか、大して速くもないパンチを出す。俺は確信した。

この程度のスピードならイける！！

俺は片方の膝を地面につき、

迫ってくる右ストレートに向かい、渾身の頭突き！！

不本意ながら女子の拳を破壊させてもらった。

「痛っ」と声を漏らし、涙目になりながら一瞬、美鈴は動きが止まる。

その一瞬を俺が見逃すはずがない。  
チャンス

頭突きの余韻で少し前のめりにだが、立ち上がった。

そして体制も整えずに無茶苦茶な左アッパーカットを繰り出す。

「美鈴よオ……」

アンタの背中ア追って健全にセイチョーする弟子に不意打ちはああ、イカンでしょッ！！」

「ほいつと、だから健くんったら大穴狙いすぎ」

頭突きされオワタ。

俺の快進撃はわずか二秒で幕を閉じ、ここからは美鈴師匠の反撃が始まる。

「アハッ

それでも、やるようになったねエ健くんっ。

んじゃあアタシも　ちょこーっただけ、本気だすね！！」

涙を払い、余裕風をふかしながら、右手を引く。  
まさかね……。



「クツ……リヤアアッ」

右手を拳にする途中、ほんの少しだけ美鈴は痛そうな顔をした。そりゃそうだ。中指と薬指の関節が完全に逆方向に向いてるんだもの。

それをオマツ……某格闘漫画に登場する二代目ヤ○ザ組長みたいに、無理矢理、拳固めこめちゃうんだから、まー美鈴ならやると、予想はしてたけどね。

「甘え甘えよ、俺のバアちゃんが作る卵焼きより甘エエッ!!」

バキッバキバキッ!!!!!!

さっきのせいか、今度は洒落にならねえスピードで飛んできた!!  
が、その右拳を俺は、前蹴りで全てを無に還した。

確実に聞いた骨がまとめられ、いつせいに碎ける音。  
俺は蹴り足（左足）を空に残したまま、右足をも空に向かわす。俺の両足は浮き、身体もイイ感じに斜めったところで、俺は両足を突き出す。

「うつ、そつ……でしょう?」

「ワリイ美鈴。

大マジだ。喰らえエエエエエッ!!」

足は大きく伸び、美鈴のよろけた身体へ一直線に……ガシッ!!  
へっ!?

「悪いね健くん。

ビックリするくらい予想通りだったよ」

「マジッすか…?」

「大マジ」

伸びきった俺の足を、左腕と脇で挟み、一気に振り回す。初めて体験するジャイアントスイングッ!!

これがさっき言った”いままでに体験したことないスリル”だと言うなら、もう心が折れた。ゴメンなさい。

俺の見る景色は全て、　　って感じになった。

その　　の中で美鈴ししょーのアリガタ―イ御言葉を聞いた。

「これは師匠に生意気言ったバツだからねっ!!  
お空でえ……反ッ省ッしなさあああいつ!!」

「うぎゃあああああああああああああつっ!!!!」

言わずもがなっ!!

俺はお空へ投げ出されたっ!!　　高い、高い、他界!?　んな物騒な事連呼するなバカ!!

それにしてもこの高さはマジでヤバイ!!

『絶対に』『死ぬ!?』『8000フィートくらいかな!?』『バ  
ンジーとかの比じゃない!!』『助けっ!!』『1フィートって何メ  
ートルだ!?』『文字通りお空!!』『だれかタウンページ持って  
来い!!』

『咲夜、レミリア、美鈴……みんな小せエな』

『石○良純を呼んで来い!!』『どうやったら助か…』『ん!?

いや呼ぶ必要ねーや！！  
□

『落ちたら…死』

『小学生の時に習った柔道の』『呼んでどうするんだ!?!』『受け身…』『午後の天気でも予報してもらおうか!?!』

あまりにも原始的で、あまりにも現実的な死の恐怖。高所からの落下。

この恐怖に蒼真健の頭はまともな判断が出来なかった。自分がなにを考えているのかも、脳内をシェイクさらたかのようにグチャグチャで理解なんてしちゃいない。

ただ感じたのは、

このまま自分<sup>が</sup>になにもしなければ、下のような錯覚に陥って……

# h! ?

そうだよ！！

今更なにを焦ることがあるんだ！！

俺は主人公じゃねーか！！

主人公がそう簡単に、たつた7話目で死ぬなんて絶対に有り得え  
ええええええええええ。

ドオオオオンツ！！！！！！

「咲夜、この子の骨くらいは拾ってやりなさい」

「はいレミリアお嬢様」  
「やつちやったZE」

というギャグ漫画オチでシメられる展開である。  
あつ！！　そういやあ”代紋<sup>エンブレム</sup>t a k e 2”は第1話で主人公死んでたな。

いやいや、そんなことはどうでもいい。

いま考えなきゃいけないのは、なにをしたら助かるか、だ！！  
とにかく、……あつ

そういやあ『とにかく』って『兎にも角にも』の略なの知ってた？

昔に作者はね二つの意味の違いが分からなくて、広○苑見たり、  
W i k i p e d i a 見たりしてたんだよ。君もこの事実を友達に教えてあげよう！！　白い目で見られるぞ！！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおツッ！！！！！！！！」

とりあえず落ちながら吠えてみたが、なにかが起る訳でもない。  
あわよくば俺の声に因って、身体が浮けばな〜と考えた私はバカ  
ですか？

いいや違うね。小さな希望に賭けて全力を尽くす。こんな俺はバカ  
ではなく、ジャンプの主人公的なキャラ、つまりはカッコイヤー  
ッということである。

地上……………

「健……落ちて来ませんね……」

空を見上げながら咲夜が言う。

それを隣でデコに平手を当て、上を見る美鈴が目を細めながら返した。

「声は聞こえるんですがねえ……。お嬢様は見えます?」

いつのまにか椅子に座っているレミリアは、ティーカップを洋風の小さな丸机（ルイージマンションに浮いてるヤツ）に置き、息をつくと、

「アタシは吸血鬼だから太陽の日照った日に空なんて見れないけど

……、

一応落ちてはいるわね。

”ココ”に向かって「

「さっすがアタシ!!」

コントロールいいな」

オイ美鈴うるさいぞ。

レミリアに咲夜が聞く。

「”ココ”……とは……?」

具体的にどこへ落下するかはわかりますか?」

レミリアは紅茶を口に流しながら、真上を指差す。

「ここ」

咲夜は焦りを隠せずに慌てだした。

当然っちゃあ当然なのかな？　なんせ目の前で主が圧死の危機にあるんだから。

美鈴もしばらくしてから、やっと理解したのか慌てだす。

「おっ… お嬢様は土と火はどちらが好きですかぁっ」

「やつ… やっぱり飾りは薔薇にしますか？」

「二人とも慌てすぎよ。」

あと死後を連想させるようなブラックなジョークはやめなさい」

駆け回る二人にレミリアはビシツと言い聞かす。

こちら辺は主の威厳というやつだろう。

咲夜はピタツと冷静になり、

「しかしお嬢様、

何故その事実がわかってるなら早く非難しないのですか!？」

「まあ…… 見てなさいよ……」

咲夜はレミリアの前で少し前かがみになって、心配そうに視線を合わそうとしながら聞くが、

レミリアは視線を合わせようとせずに紅茶を置き、ふうっと一息ついて、

「あのバカなら平気よ……」

それに、死んだら死んだでその程度の男だったことで諦めがつくわ」

「いや、そのバカと心中する危機にあるんですよっ!!」

レミリアの言葉に反応した美鈴が素早く平手で空を叩く。簡単に言えばツツコミである。

「それも問題はないわよ。私は死なないんだから」

「まあ……それでも、ぶつかった拍子に太陽光に当たっちゃったら……」

美鈴は鬱陶しいくらいレミリアを心配する。

まったく咲夜を見習いなさい。冷静になった咲夜の隣で美鈴はいまだにウロウロしている。

そんな美鈴の心情を察してか、レミリアはため息をついてから口を開いた。

「まったく、安心しなさいよ。アタシも蒼真健も死にはしないわよ。」

そう言い切るレミリアの顔はどこか嬉しそうにも見える。そこからクスツと笑い、

「あの子、カリスマ性に溢れてるわね!!  
アタシみたいに……」

「レミリアお嬢様みたいに……ですか……?」

美鈴は少しわからないような難しい顔をして首を傾げて腕を組む。そんな顔を見てレミリアはもう一度笑うと、日傘越しに空へ視線をやり、

「私の考えていたモノよりも、ずっと面白いやり方ね。蒼真健……」

空中……………

しかし

落ちるとこまで落ちてきましたね、俺も。

あとちょっとで死ぬってのに、よく俺も平然としてられるよね。

もしかしてこれが今流行りのクール系ってヤツか！！

じゃあこの姿をクラスの女子とかに見せたらきつと明日からモテにモテまくって、学級委員とかになれんじゃねーのか！？

逆さまになりながら嬉しそうに腕を振る健。

しかしこの超スピードで落ちているにも関わらず、妄想に喜んでみせるバカ丸出しの態度には、なんとも驚かされる。

もちろん健はただのバカではない。

先までの浅はかなオチの予想、くだらない付け加え、石原〇純、今の妄想。

それに称号を付けるなら”バカの常軌を逸したバカ”。いや、”正しいバカ”。

こういった場面で冷静にはしゃぐバカはある意味1番正しいと言える。

モンキー・D・ルフィだってナルトだってそうだ。

言ったようにこのバカ（共）は、どこに出しても恥ずかしい程のバカである。





身体を大きく広げた健を中心に蒼白い光は弾け、辺りに散らばる。

「頼むぜえ……………」

健は蚊の羽音のように小さな声で呟くと、広げた手足をぶらんと垂らした。

落下スピードは徐々に増していき、速くなるにつれて健の意識は段々と薄れていった。

地上まで後……………

第七話 カパパカッパって言ってみ、無理だから（後書き）

あー

やっちゃったよー

俺ってどうして主人公を投げ飛ばすクセがあるんでしょう？

しかも最初の最初に（<ー>）

健くん頑張って！！

気絶したっばいけど頑張って！！

次回も掃魔の剣を…をたのしみにやあっ！！

をたのしみにやあつとは、「テンションの高い」お楽しみに”です。  
でわ改めてをたのしみにやあっ！！

## 第八話 ババア三人いるとやかましい（前書き）

アナタの嫁がボロボロになるかもしれません。気をつけて下さい。

健くんは基本的に外道です。女子にも手加減なしで追い撃ちをかけます。

ばーきー

以上、注意書きでした

では始まりまーすノ

## 第八話 ババア三人いるとやかましい

バカな……

驚いたのには二つ程、理由がある。

まず一つ目は、俺は気絶していた事だ。

現在俺は仰向けで倒れていて、囲むように、三人が俺の顔を覗き込んでいる。

俺は気絶した。しかし助かっていた。美鈴や咲夜が助けてくれたと言うことも考えたが、三人の態度からして、それは違うと言うことが理解<sup>わか</sup>る。

そして二つ目、正直コレが1番謎だ。

俺の寝転がるすぐ隣。

ちよつと寝返りをうつただけで、落ちてしまいそうなくらい近くに、直径7〜8メートルくらいの巨大な穴。先程、自分で視認したが、この穴がどれだけ深いのかは解っていない。

いやもしかしたら、ほんの30センチくらいかもしれない。なにせこの大きな穴の中には青く透き通る水が満たされていたから

「健く〜ん！？ もしも〜し生きてますかあ〜！？」

うるせー美鈴。もう起きてるわ！！ お目々パツチリの俺に視線を合わせ、頬を（俺の）をペチペチと平手で軽く叩く。

あーもうウットーしいっ！！ シッシッ！！

「よく生きてたじゃない。

あの高所からの落下で。

どうやったからは見ていたから解るけど…

よく” あんなの” 思いついたわね!?”

咲夜は郭 海皇が生きていたと知ったときの春成みたいな顔をして  
(意味不) 俺に聞いた。

「まあな直感的に感じたんだよ。 力の使い方を……」

正直……

どう助かったかなんて覚えちゃいない。

咲夜の質問をついごまかしてしまったが、俺がわからないことには  
始まらない。

ここは正直に聞いたほうが良いな。聞くは一時の恥、聞かぬは一生  
の恥ってな。

しかし俺だつて最初から最後まで分からない訳ではない。

気絶するまでの記憶は鮮明に残っている。

死を予感したからな。

そして能力の使い方と、蒼の使い方が何と無くだが理解出来ている  
ような気がする。

そう俺は現在、0.999999999999……という状態で、まだ

”1”には成れていない。

あとは俺の直感と、咲夜やレミリア、美鈴の支えと、ほんの小さな  
切っ掛けで俺は変わる事を感じていた。

「まあ……気絶してたから、あんまり覚えちゃいけないけどな……アハ  
ハ……」

「やっぱりね。」

わからないなら理解<sup>わか</sup>らないで、最初に言いなさいよ。まったくやや  
こしいわね、このドブ男」

レミリアがフンツと鼻息を鳴らし、短い足を組み、背もたれによつ掛かり、咲夜に手招きした。

咲夜はここでもやっぱり瀟洒なメイド、腹立つクソガキレミリアの生意気な態度に眉一つ動かさず、近寄り、耳をレミリアの口元に近づける。

まったくレミリアには咲夜の垢を煎じて、いや、そのまま皮膚ごと食わしてやりたいね。

「斯<sup>か</sup>く斯<sup>しか</sup>く然<sup>じ</sup>然<sup>か</sup>!!」

なるほど。

つまり俺がやったのは こう言う事だ。

まず『宇宙を操る程度の能力』その1、『重力』で地面に大穴を空け、

新たに発生した能力その2、『引力』で大気中の水分を一点に集め、巨大な水玉にして穴へ。

これで巨大水溜まりの完成。

しかしそれだけじゃ俺は死んでしまう。

なんでって、そんな高所から落下したら、いくら下が水といっても、コンクリートと何も変わらない。

時速80キロで水面に激突すると、水はコンクリートの硬さへと化ける。

ガイアさんの言う通りさ。

まだ使い道も知らない『蒼』。

それがこの場面で使われたらしい。

先ほど落とした巨大水玉、そこからほんの少し、

俺の体を包めるくらいの水を切り取り、字の通り、俺を包む。

水は水同士、衝撃を相殺しあい、結果水の中にいた俺は無事と……  
こんなところだが、  
まだ蒼の能力がわからない。それに……  
宇宙を操る程度の能力の能力の種類。

おそらく聞いた話に出た、二つの能力。重力と引力はたいてい想像がつく。

『重力』は物体の重さを変える。まあ正しく言うとその物体の周りの重力を変える。地面を凹ます事も可能。  
ただし精神面的に凹ますのは不可能。

ナイフをガラクタにしたのは、この能力の改良バージョン。  
重力を変えて、その重さに物体が耐えられなくなり、ペチャン。

らしい。

『引力』は引き付ける能力。水素分子…あれ？ 原子だっけ？…をも引き寄せる事が可能。

物体はもちろん、原子分子等も引き寄せる事が出来る。ただし気になるアノ子のハートは引き寄せられない。

使い方に因っては相手から酸素を奪い窒息なんてのも出来るかもしれない。やれたとしても、やらんがな。

気絶したのは大気中の水分を取るなんて無茶をしたからだ。集中力的な問題で分子を引くのは多様出来ない。

と言うこと。



「わかった？」

「オーケー把握した！！」

返事と一緒に拳を見せる。自信ありげだぜッ

.....

「美鈴っ！！」

「およ！？」

もちろん呼んだのは俺だ。美鈴は急に呼ばれたのに驚いたのか、目を丸くしてコツチを見る。

俺は既に立ち上がっているが美鈴の視線は少し高い位置にあった。

呼んだ理由なんて他にはない。

俺はまだ、ギブアップもしていなければ、負けたつもりだってない。咲夜が気を利かせてくれたのか、隣に落ちていた木剣を拾い、その切っ先を美鈴の顔に向ける。

周りのレミリア、咲夜は同じ顔をして笑っていた。

「まだ終わってねエぞ.....」

恰好付けた。

丸腰の女子相手に木刀を持った男子高校生が堂々と恰好付けた！！美鈴はピクリとも動かずに直立不動のまま、俺を見つめる。

あたりから生暖かい嫌な風が吹きはじめた。張り詰めた空気を掻き消すようにレミリアは呟く。

「やるなら、さっさと始めなさいよ！

ゴングなんてイラナイでしょ？」

「いらねエよ」

先に飛び出したのは健だった。

健は怪物の様に顔一面に血管を浮かべ、力いっぱい木刀で美鈴を殴り付ける。

初段は美鈴の左腹に直撃！！

苦痛に耐えるため、美鈴は歯を喰い縛り、木刀を掴む。

「ちえいさーっ！！」

木刀を掴まれ、身動きの取れなくなった健は、美鈴の激しい後ろ廻し蹴りを左腹に喰らう。

美鈴の爪先が健の肋を砕いた。

思わず健も木刀から手を離し、左脇腹を両手で抑える。あまりの痛みには健は声を漏らした。

その姿を見てレミリアが、

「ちょっと美鈴ッ！！

あんた一発目にそれはやり過ぎよッ！！

もうすこし手加減しなさい！！」

「そ、そんなあゝ

わたしだつてアバラ痛いですよ!？」

獅子のように力強いレミリアの声に、ちょっと怯えた美鈴は産まれたての小鹿の様に振るえた声で、プラス涙目で言い返す。

言い返した刹那、

美鈴の口いっぱい鉄味が広がる。

レミリアに気取られて、後ろを向いた美鈴の背後から、脳天目掛けて渾身の踵落としをモロに喰らい、口の中で舌が半切断された。

美鈴は険しい顔をして、血を撒き散らしながら振り向くと、美鈴の視界は自分の血がかかった拳に埋め尽くされた。

右ストレートッ!!

見事に直撃。美鈴の身体は後ろにのけ反り、勢いに因って両手は前に伸びる。

健は飛び上がり、またも踵落としを試みる!!  
しかし……

「咲夜さんの作る卵焼きより甘いよっ

」

健の振り下ろした足は、いとも簡単に取られ、空中で身動きがとれなくなってしまう。

美鈴はガツシリ掴んだ足首を自分の方へ引っ張ると同時に、おかえしと言わんばかりの右ストレートを放つ!!

「ちょッ……バカッ!!」

美鈴！！ 止めなさいッ！！」

咲夜が慌てて声を出す、この時の二人には何も聞こえていない。

美鈴は耳を傾けようとせず、拳を突き出す。

けど、

美鈴の右拳はさっきの闘いで既に破壊されているはず

健が心配をする必要なんて、

まるで無い。

迫る拳には血に塗れた包帯がグルグル巻きにしてあった。殴る側の美鈴は一点の迷いもなく、さながら当たり前かのように、その拳を突き出す。

閃光の様に疾<sup>はや</sup>いストレートを健は躲<sup>は</sup>す事が出来なかった。しかし当たってなんかいない。

「ダッ！！ シャアッ！！！！」

健の鼻先に拳が触れるや否や、健は気合い一声。美鈴の身体はカクンと動きが止まり、背ろの城壁に凄まじい勢いで引き寄せられた。

引き付ける力は美鈴の予想を遥かに上回っていた。比べると、あまりにも力強く、速く。

いつか発動するだろう、と狙いを絞っていた美鈴も反応することは出来なかった。

壁に張り付けられた美鈴に向かって、健は拾い上げた木刀を投げつける。

動けないのだから当然、凄まじい速さの回転を帯びた木剣は美鈴の腹部に電撃の様な衝撃を与えた。

そして、健はさらなる追い撃ちをかける。

美鈴のもとへ走り、その勢いを殺さずに前蹴りを繰り出す。美鈴は白目をむき、減り込んだ壁から剥がれ落ちると、そのまま地面へと俯せに倒れた。

「ハアハア……

俺が……

俺が最強だああああッ！！！！

ウオオオオオオオオッ！！！！」

溜めに溜めた息と一緒に吐きだす勝利の雄叫びは幻想郷じゅうに響き渡った。

血まみれになった健と、ピクリとも動かない美鈴に咲夜は軽く拍手をして。

「二人とも……

良い戦いだっただわよ……

健もよく頑張ったわ」

ニコツと笑う咲夜に少し照れながら、

「この俺が負けると思ってたのかよ？

ったく……美鈴にも聞かせてやりたいね」

咲夜は更に笑いだし、

「ふふっ

まさか美鈴からダウンを取るなんて……」

はい？

言うところのさっきまで倒れていたはずの美鈴が立って、いつもの明るい笑みをして、手を振っていた。

「健くんっ

今回は潔く負けを認めるケド……

最強の称号はレミリアお嬢様のモノだから、勘違いすんなよっバーン」

美鈴は指で鉄砲を作り、俺に向けて撃つ。

あの指鉄砲には本当に弾丸がセットされていたのではないか、俺は頭が真っ白になった。

## 第八話 ババア三人いるとやかましい（後書き）

なんか”ちびまる子ちゃん”みたいなオチの付け方になっちゃってムズ痒い感が否めません。

今回は本格的な修行になったらイイナーって思いますッ!!

おたのしみにつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6998s/>

---

東方 掃魔の剣

2011年11月15日17時56分発行